

## 山形県立保健医療大学看護学科と 山形県立中央病院看護部との連携に関する意識

遠藤 恵子<sup>1)</sup>・片桐 智子<sup>1)</sup>・芳賀 真理<sup>2)</sup>菅井 憲子<sup>2)</sup>  
今野 恵利子<sup>2)</sup>・阿部 さゆり<sup>2)</sup>・鎌田 美千子<sup>2)</sup>

### Attitudes toward Cooperation between the Department of Nursing, Yamagata Prefectural University of Health Sciences and the Nursing Department, Yamagata Prefectural Central Hospital

Keiko Endo<sup>1)</sup>, Tomoko Katagiri<sup>1)</sup>, Mari Haga<sup>2)</sup>, Noriko Sugai<sup>2)</sup>,  
Eriko Konno<sup>2)</sup>, Sayuri Abe<sup>2)</sup>, Michiko Kamata<sup>2)</sup>

#### Abstract

This study used an anonymous questionnaire survey to elucidate attitudes toward, and challenges confronting, a cooperative project undertaken by Yamagata Prefectural University of Health Sciences and Yamagata Prefectural Central Hospital. We distributed a questionnaire to 26 teachers of the Department of Nursing at the university and to 643 nurses of the hospital. We collected responses from 13 teachers and 434 nurses.

University teachers reported the following as greatly necessary: “Teachers give nurses advice on progressing to graduate school,” “Nurses use facilities of the university,” and “Nurses teach student practicums.” They hoped to “Do research together with nurses” and to “Participate in a study group held in the hospital.” However, hospital nurses reported that the following are much needed: “Nurses teach students practicums,” “Nurses use facilities of the university,” and “Teachers provide students with information about the hospital.” They hoped to “Use facilities of the university” and to “Participate in a study group held in the university.” The ratio of teachers who considered that the cooperation was very beneficial is higher than that of nurses to all of “Myself,” “My affiliation,” “Local residents,” and “The partner of the cooperation.”

Both hospital nurses and university teachers viewed ongoing teaching of practicums and the use of facilities as necessary for effective cooperation.

**Key words** : unification, nurse, Yamagata Prefectural University of Health Sciences,  
Yamagata Prefectural Central Hospital

---

1) 山形県立保健医療大学看護学科  
〒990-2212 山形市上柳 260  
Department of Nursing,  
Yamagata Prefectural University of Health Sciences  
260 Kamiyanagi, Yamagata-shi, Yamagata, 990-2212, Japan

2) 山形県立中央病院  
〒990-2292 山形市青柳 1800  
Yamagata Prefectural Central Hospital  
1800 Aoyagi, Yamagata-shi, Yamagata, 990-2292, Japan

(受付日 2018. 12. 10, 受理日 2019. 2. 8)

## 緒 言

公立大学法人山形県立保健医療大学（以下、本学）は、昭和 29 年に創立した山形県立高等看護学院（昭和 32 年、山形県立高等保健看護学院と改称）が発展改組し、平成 12 年に開学、その後平成 21 年に公立大学法人に移行し現在に至っている。山形県立高等看護学院の校舎は、創立時、山形県立山形病院（現、山形県立中央病院 以下 病院）の敷地内に建築された。その後、それぞれ移転や設置主体の変更があったが、連携しながら教育や研究を行ってきた。

米国において 1960 年代から看護学教育機関と保健医療機関の連携が報告されている<sup>1)</sup>。米国では、ユニフィケーションは、医療機関と教育機関が同一の設置主体のもとに運営され、同一の看護職が学生への教育と患者への実践の両方に責任をもつこと、一方、設置主体が異なる医療機関と教育機関が同一の看護職が併任の形で学生への教育と患者への実践の両方に関わるものをコラボレーションといい、ユニフィケーションと区別して使用されていた<sup>2)</sup>。しかし、現在日本では、設置主体の異同に関わらず、教育と臨床の連携による教育の充実を、ユニフィケーションと表現している。

看護学分野における看護系大学と看護の臨床とのユニフィケーションの効果として、学生への効果<sup>3) 4) 5) 6)</sup>や臨床の看護師への効果<sup>7) 8) 9)</sup>、教員と看護師の研究の効果<sup>8) 10)</sup>、教員と看護師の実践能力向上<sup>11) 12)</sup>等、数多く報告されている。さらに、地域の看護師の実践能力向上の活動<sup>13)</sup>も報告されている。

看護学教育において、医療機関との連携は不可欠である。平成 26 年 3 月、本学と病院の両機関の役割をふまえ、それぞれの機能・人材及び設備等の活用を図りながら、連携をさらに推進することにより、山形県の医療の質の向上、医療人材の育成・資質向上等に貢献することを目的に、公立大学法人山形県立保健医療大学・山形県立中央病院連携協議会（以下 連携協議会）が設置された。

大学と病院が連携をさらに推進するためには、大学教員と病院看護師一人一人の意識が重要である。大学教員と病院看護師の連携に関する意識を明らかにすることで、本学と病院の実情に即した具体的な連携の方向性や計画を検討できると考え

る。しかし、本学と病院の連携に関して、大学教員と病院看護師の意識は把握できていない。

## 研究目的

山形県立保健医療大学に勤務する看護職の教員および山形県立中央病院に勤務する看護師の、大学と病院との連携に関する意識を明らかにする。

## 用語の操作的定義

連携：山形県の医療の質の向上や人材育成資質向上を目的に、本学と病院、両機関の役割をふまえ、協力しながら取り組むこと

連携事業：連携における、それぞれの機能・人材及び設備等の活用を図りながら本学教員や病院看護師が行う具体的な活動

## 研究方法

### 1. 対 象

本学に勤務する看護職の教員、および病院に勤務する連携協議会看護専門部会の委員を除く看護師

### 2. 調査内容

現在実施している連携事業や今後実現可能と考えられる連携事業 24 事業に対して、必要と考えるかを「とても必要」「どちらかというと必要」「必要ない」の 3 段階で尋ねた。また、教員に対しては、24 の連携事業のうち大学や教員が主として役割を果たす 15 事業について、看護師に対しては、病院や看護師が主として役割を果たす 13 事業について参加希望の有無を尋ねた。さらに、本学と病院が連携することで、自分自身、自分の所属、相手の所属、地域住民にとってメリットがあると思うかを、4 段階で尋ねた。

### 3. 調査方法

それぞれの所属長に文書にて研究協力を依頼した。大学は、学科長から、病院は、各病棟師長から、研究説明文書と無記名の自作調査用紙を対象者に配布した。対象者は調査用紙記入後、それぞれの所属が指定する回収箱に投函した。

表1 看護師の属性

		n=434	
		n	%
職位	スタッフ	177	40.7
	主任	163	37.6
	看護主査	51	11.8
	看護師長以上	23	5.3
	無回答	20	4.6
学歴	専修学校卒	298	68.7
	短大卒	24	5.5
	大学卒	66	15.2
	大学院修了	7	1.6
	無回答	39	9.0
部署	一般病棟	208	47.9
	救命系	92	21.2
	その他	95	21.9
	無回答	39	9.0

#### 4. 分析方法

単純記述で集計した。看護師の職位と学歴による意識の比較、および教員と看護師の比較には、 $\chi^2$ 検定 (SPSS ver.25)、期待度 5 未満の場合 Fisher 正確確率検定 (R) を行った。有意水準を 5% 未満とした。

#### 5. 倫理的配慮

対象となる教員と看護師に対し文書で研究概要を説明した。研究協力について自由意志の保証、研究協力の諾否による不利益は一切ないことの保証、および無記名の調査用紙を用い匿名性を保証した。研究成果を公表する際は、対象者個人が特定できる表現はしないが、山形県立中央病院・山形県立保健医療大学の実名を記載することを、文書で説明した。調査用紙の投函をもって同意とした。研究者の所属施設の倫理審査の承認を得た。

山形県立保健医療大学倫理審査承認番号 1708-10 2017.8.10

山形県立中央病院看護研究倫理審査承認番号 193 2017.7.11

## 結 果

#### 1. 対象者の属性

大学は看護学科の看護職の教員 26 人に配布し 13 人から調査用紙を回収した (回収率 50.0%)。すべて有効回答であった。

病院は看護職 643 人に配布し 434 人から調査用紙を回収した (67.5%)。すべて有効回答であっ

た。看護師の属性を表 1 に示した。職位は、スタッフが 177 人 (40.7%)、主任 163 人 (37.6%)、看護主査 51 人 (11.8%)、看護師長以上 23 人 (5.3%) であった。学歴は、専修学校卒業が 298 人 (68.7%)、短大卒業 24 人 (5.5%)、大学卒業 66 人 (15.2%)、大学院修了 7 人 (1.6%) だった。

#### 2. 大学教員の連携事業に対する意識

##### 1) 大学教員が必要と考える連携事業

大学教員が必要と考える連携事業について表 2 に示した。「教員が看護師の大学院進学相談にのる」は 9 割以上、「看護師が大学の施設を利用する」は 8 割以上が「とても必要」と回答した。その他、「看護師が学生の実習指導をする」「看護師と教員が一緒に研究する」「看護師が大学の勉強会に参加する」「看護師が自分の活動を教員に情報提供する」「教員が病院の施設を利用する」「教員が病院に勤務する卒業生の相談にのる」「教員が看護師の行う研究を支援する」で半数以上が「とても必要」と回答した。一方、「必要ない」と回答した人数が多かった事業は、「教員が院内教育計画に参加する」「教員が実習指導の研修会の講師となる」「教員が看護実践の研修会の講師となる」「教員が病院の看護師として勤務する」「教員が病院の情報を学生に情報提供する」「看護師と教員が一緒に患者や住民対象の研修会を開催する」であった。

##### 2) 大学教員が参加を希望する事業

大学教員が参加を希望する事業について、表 3 に示した。「看護師と一緒に研究を実施する」「病

表 2 大学教員が必要と考える連携事業

	n=13					
	とても必要		どちらかという必要		必要ない	
	人	%	人	%	人	%
教員が、看護師の大学院進学相談	12	92.3	0	0.0	0	0.0
看護師が、大学の施設利用	11	84.6	1	7.7	0	0.0
看護師が、学生の実習指導	10	76.9	2	15.4	0	0.0
看護師と教員と一緒に、研究	9	69.2	2	15.4	1	7.7
看護師が、大学の勉強会に参加	8	61.5	4	30.8	0	0.0
看護師が、自分の活動を教員に情報提供	8	61.5	3	23.1	1	7.7
教員が、病院の施設利用	8	61.5	4	30.8	0	0.0
教員が、病院に勤務する卒業生の相談	7	53.8	4	30.8	1	7.7
教員が、看護師の行う研究支援	7	53.8	5	38.5	0	0.0
看護師が、学生の講義や演習の講師	6	46.2	6	46.2	0	0.0
看護師と教員と一緒に、看護師や学生対象の研修会開催	6	46.2	5	38.5	1	7.7
教員が、実習指導の研修会の講師	6	46.2	2	15.4	4	30.8
教員が、自分の活動について看護師に情報提供	6	46.2	4	30.8	2	15.4
看護師と教員と一緒に、患者や住民対象の研修会開催	5	38.5	4	30.8	3	23.1
教員が、病院の事例検討会や勉強会に参加	5	38.5	5	38.5	2	15.4
看護師が、学生の実習計画に参加	4	30.8	6	46.2	2	15.4
看護師が、教員対象の研修会の講師	4	30.8	7	53.8	1	7.7
看護師が、大学で教員	4	30.8	7	53.8	1	7.7
看護師と教員と一緒に、県内看護師対象の研修会開催	4	30.8	7	53.8	1	7.7
教員が、病院の情報を学生に情報提供	4	30.8	5	38.5	3	23.1
教員が、看護実践の研修会の講師	3	23.1	5	38.5	4	30.8
教員が、病院の看護師として勤務	3	23.1	6	46.2	3	23.1
看護師が、卒業生の状況を教員に情報提供	1	7.7	9	69.2	2	15.4
教員が、院内教育計画に参加	0	0.0	7	53.8	5	38.5

表 3 大学教員が参加を希望する事業（複数回答）

	n=13	
	人	%
看護師と一緒に、研究を実施	9	69.2
病院で行っている事例検討会や勉強会に参加	8	61.5
看護師の大学院進学に関する相談にのる	8	61.5
看護師の行う研究の支援	7	53.8
病院の図書館や病院の施設を利用	6	46.2
看護師と一緒に、看護師や学生を対象にした研修会を開催	6	46.2
卒業生の悩みを聞いたりフォロー	5	38.5
一定期間病院の看護師として勤務	4	30.8
看護師と一緒に、県内看護師を対象とした研修会を開催	4	30.8
看護師と一緒に、患者や住民に対する研修会を開催	3	23.1
実習指導に関する研修会の講師として参加	2	15.4
看護実践に関する研修会の講師として参加	2	15.4
院内教育プログラムの計画に参加	2	15.4
自分たちの活動について看護師に情報提供	2	15.4
病院に関する情報を学生に情報提供	2	15.4

表 4 病院看護師が必要と考える連携事業

	とても必要		どちらかという必要		必要ない	
	人	%	人	%	人	%
看護師が、学生の実習指導	249	58.1	161	37.5	19	4.4
看護師が、大学の施設利用	235	54.5	172	39.9	24	5.6
教員が、病院の情報を学生に情報提供	195	45.1	209	48.4	28	6.5
教員が、実習指導の研修会の講師	166	38.5	229	53.1	36	8.4
教員が、病院に勤務する卒業生の相談	155	35.8	221	51.0	57	13.2
教員が、病院の施設利用	151	34.9	224	51.7	58	13.4
教員が、自分の活動について看護師に情報提供	144	33.3	241	55.6	48	11.1
看護師が、自分の活動を教員に情報提供	136	31.5	236	54.6	60	13.9
教員が、看護師の大学院進学相談	133	30.9	225	52.4	72	16.7
教員が、看護実践の研修会の講師	123	28.5	235	54.4	74	17.1
教員が、病院の事例検討会や勉強会に参加	117	27.0	227	52.4	89	20.6
教員が、看護師の行う研究支援	117	27.1	233	54.1	81	18.8
看護師が、学生の実習計画に参加	115	26.5	243	56.0	76	17.5
教員が、病院の看護師として勤務	108	25.0	188	43.5	136	31.5
教員が、院内教育計画に参加	107	24.7	214	49.4	112	25.9
看護師が、大学の勉強会に参加	95	22.0	266	61.8	70	16.2
看護師と教員と一緒に、看護師や学生対象の研修会開催	94	21.7	250	57.7	89	20.6
看護師が、卒業生の状況を教員に情報提供	86	19.9	200	46.3	146	33.8
看護師が、学生の講義や演習の講師	82	19.0	256	59.4	93	21.6
看護師と教員と一緒に、県内看護師対象の研修会開催	62	14.4	234	54.3	135	31.3
看護師と教員と一緒に、研究	49	11.3	225	52.0	159	36.7
看護師と教員と一緒に、患者や住民対象の研修会開催	42	9.7	182	41.9	210	48.4
看護師が、教員対象の研修会の講師	39	9.0	222	51.4	171	39.6
看護師が、大学で教員	30	7.0	165	38.6	232	54.4

院で行っている事例検討会や勉強会に参加する」「看護師の大学院進学に関する相談にのる」は参加を希望する者が6割を超えていた。一方、参加希望の少ないものは「実習指導に関する研修会の講師となる」「看護実践に関する研修会の講師となる」「院内教育プログラムの計画に参加する」「自分たちの活動について看護師に情報提供する」「病院に関する情報を学生に情報提供する」であった。

### 3. 病院看護師の連携事業に対する意識

#### 1) 病院看護師が必要と考える連携事業

病院看護師が必要と考える連携事業について表4に示した。「看護師が学生の実習指導する」「看護師が大学の施設を利用する」は、「とても必要」と答えた割合が半数を超えていた。その他、「教員が病院の情報を学生に提供する」「教員が実習指導の研修会の講師をする」「教員が病院に勤務する卒業生の相談にのる」「教員が病院の施設を利用する」「教員が自分の活動について看護師に情報提供する」「教員が看護師の大学院進学相談にのる」で3割以上が「とても必要」と回答した。

一方、「必要ない」と答えた割合が高かった事業は、「看護師が大学で教員をする」「看護師と教員と一緒に患者や住民対象の研修会を開催する」「看護師が教員対象の研修会の講師をする」「看護師と教員と一緒に研究する」「看護師が卒業生の状況を教員に情報提供する」であった。

#### 2) 病院看護師が参加を希望する事業

病院看護師が参加を希望する事業について、表5に示した。参加を希望する者は、「図書館や実習室などの大学の施設の利用」が6割、「大学で開催している勉強会に参加」は5割を超えていた。「学生の臨床実習の指導」を参加希望すると回答したのは約27%であった。一方、参加希望の少ないものは「教員を対象にした研修会の講師として参加」「教員と一緒に患者や住民を対する研修会を開催」「一定期間大学で教員として勤務」であった。

### 4. 大学教員と病院看護師の連携によるメリットの認識

大学教員と病院看護師が認識する連携によるメリットについて表6に示した。

表 5 病院看護師が参加を希望する事業 (複数回答)

	n=434	
	人	%
図書館や実習室などの大学の施設を利用	265	61.1
大学で開催している勉強会に参加	222	51.2
学生の臨床実習の指導	115	26.5
学生の臨床実習の計画に参加	81	18.7
自分たちが行っている活動を教員に情報提供	55	12.7
教員と一緒に、看護師や学生を対象にした研修会を開催	51	11.8
教員と一緒に、研究を実施	51	11.8
大学卒業生の勤務状況を教員に情報提供	41	9.4
教員と一緒に、県内看護師を対象とした研修会を開催	37	8.5
学生の講義や演習に講師として参加	35	8.1
一定期間大学で教員として勤務	34	7.8
教員と一緒に、患者や住民に対する研修会を開催	31	7.1
教員を対象にした研修会の講師として参加	13	3.0

表 6 連携によるメリット

		教員n=13 看護師 n=434								
		とてもある		少しある		あまりない		全くない		
自分自身	教員	6	46.2	6	46.2	1	7.6	0	0.0	*
	看護師	59	13.7	193	44.7	150	34.7	30	6.9	
自分の所属	教員	10	76.9	2	15.4	1	7.7	0	0.0	**
	看護師	71	16.4	205	47.5	130	30.1	26	6.0	
地域住民	教員	3	23.1	7	53.8	3	23.1	0	0.0	
	看護師	52	12.0	165	38.1	195	45.1	21	4.8	
連携の相手	教員	7	53.8	5	38.5	1	7.7	0	0.0	
	看護師	106	24.5	237	54.9	78	18.1	11	2.5	

$\chi^2$  検定で期待度5未満の場合 Fisher正確確率検定 \*p<0.05 \*\*p<0.01 無回答は分析に含まず

大学教員の連携によるメリットの認識については、自分自身に対して「とてもある」「少しある」が6人(46.2%)ずつであった。自分の所属に対しては「とてもある」10人(76.9%)であった。地域住民にとってのメリットは、「少しある」7人(53.8%)でもっとも多かった。連携の相手である病院にとってのメリットは、「とてもある」7人(53.8%)がもっとも多かった。自分自身、自分の所属、地域住民、連携の相手いずれに対してもメリットが「全くない」と答えたものはいなかった。

病院看護師の連携によるメリットの認識については、自分自身に対して「少しある」が193人(44.7%)ともっとも多く、次いで「あまりない」150人(34.7%)であった。自分の所属に対しては「少しある」205人(47.5%)、次いで「あまりない」130人(30.1%)であった。地域住民にとってのメリットは、「あまりない」195人(45.1%)がもっとも多く、次いで「少しある」165人(38.1%)で

あった。連携の相手である大学にとってのメリットは、「少しある」237人(54.9%)、次いで「とてもある」106人(24.5%)であった。自分自身、自分の所属、地域住民、連携の相手いずれに対しても、メリットが「全くない」と答えたものがいた。

大学教員と病院看護師で連携によるメリットの認識の程度を比較したところ、大学教員は自分自身にとってある、自分の所属にとってメリットがあると答える割合が病院看護師に比べ高く、大学教員と病院看護師で有意な差がみられた。

##### 5. 病院看護師の職位と連携に関する意識

病院の看護師について、主任以上、看護主査、看護師長以上を主任以上群とし、主任以上群とスタッフ看護師で、連携に関して必要と考える程度を比較した(表7)。「看護師が卒業生の状況を教員の情報提供する」で、スタッフと主任以上群で有意な差がみられた。

表7 病院看護師が必要と考える連携事業 職位での比較

		スタッフn=177 主任以上n=237					
		とても必要		どちらかという必要		必要ない	
		人	%	人	%	人	%
看護師が、学生の講義や演習の講師	スタッフ	39	22.2	102	57.9	35	19.9
	主任以上群	36	15.3	148	63.0	51	21.7
看護師が、学生の実習計画に参加	スタッフ	44	24.9	105	59.3	28	15.8
	主任以上群	64	27.0	128	54.0	45	19.0
看護師が、学生の実習指導	スタッフ	112	64.3	57	32.8	5	2.9
	主任以上群	129	54.9	94	40.0	12	5.1
看護師が、教員対象の研修会の講師	スタッフ	17	9.6	102	57.6	58	32.8
	主任以上群	20	8.5	111	47.2	104	44.3
看護師が、大学の勉強会に参加	スタッフ	37	21.0	106	60.2	33	18.8
	主任以上群	56	23.7	148	62.7	32	13.6
看護師が、大学で教員	スタッフ	16	9.2	70	40.2	88	50.6
	主任以上群	14	6.0	84	35.9	136	58.1
看護師が、大学の施設利用	スタッフ	95	53.7	68	38.4	14	7.9
	主任以上群	129	55.2	96	41.0	9	3.8
看護師が、自分の活動を教員に情報提供	スタッフ	55	31.3	99	56.2	22	12.5
	主任以上群	76	32.1	128	54.0	33	13.9
看護師が、卒業生の状況を教員に情報提供	スタッフ	23	13.0	83	46.9	71	40.1
	主任以上群	60	25.5	105	44.7	70	29.8
看護師と教員と一緒に、看護師や学生対象の研修会開催	スタッフ	38	21.5	103	58.2	36	20.3
	主任以上群	52	22.0	136	57.7	48	20.3
看護師と教員と一緒に、県内看護師対象の研修会開催	スタッフ	19	10.9	102	58.2	54	30.9
	主任以上群	40	16.9	121	51.3	75	31.8
看護師と教員と一緒に、患者や住民対象の研修会開催	スタッフ	14	7.9	81	45.8	82	46.3
	主任以上群	25	10.5	93	39.2	119	50.3
看護師と教員と一緒に、研究	スタッフ	21	11.9	81	45.7	75	42.4
	主任以上群	27	11.4	132	56.0	77	32.6
教員が、実習指導の研修会の講師	スタッフ	75	42.6	88	50.0	13	7.4
	主任以上群	82	34.7	134	56.8	20	8.5
教員が、看護実践の研修会の講師	スタッフ	50	28.2	98	55.4	29	16.4
	主任以上群	66	28.0	130	55.1	40	16.9
教員が、病院の事例検討会や勉強会に参加	スタッフ	41	23.2	97	54.8	39	22.0
	主任以上群	70	29.5	124	52.4	43	18.1
教員が、院内教育計画に参加	スタッフ	39	22.0	94	53.1	44	24.9
	主任以上群	65	27.4	112	47.3	60	25.3
教員が、病院の看護師として勤務	スタッフ	44	25.0	80	45.5	52	29.5
	主任以上群	60	25.3	97	40.9	80	33.8
教員が、看護師の大学院進学相談	スタッフ	58	33.0	88	50.0	30	17.0
	主任以上群	71	30.2	129	54.9	35	14.9
教員が、病院に勤務する卒業生の相談	スタッフ	58	32.8	91	51.4	28	15.8
	主任以上群	90	38.0	123	51.9	24	10.1
教員が、看護師の行う研究支援	スタッフ	46	26.1	97	55.1	33	18.8
	主任以上群	68	28.8	126	53.4	42	17.8
教員が、病院の施設利用	スタッフ	61	34.5	91	51.4	25	14.1
	主任以上群	83	35.0	123	51.9	31	13.1
教員が、自分の活動について看護師に情報提供	スタッフ	57	32.2	101	57.1	19	10.7
	主任以上群	80	33.8	130	54.8	27	11.4
教員が、病院の情報を学生に情報提供	スタッフ	89	50.3	77	43.5	11	6.2
	主任以上群	100	42.4	121	51.2	15	6.4

$\chi^2$  検定期待度5未満の場合Fisher正確確率検定 \*\*p<0.01 無回答は分析に含まず

連携によるメリットについて、主任以上群とスタッフ看護師で比較した(表8)。「自分自身」「自分の所属」「地域住民」「連携の相手」に対するメリットは、とてもあると答えた割合は、スタッフに比べ主任以上群の方が高かったが、統計的に有意な差はみられなかった。

## 6. 病院看護師の学歴と連携に関する意識

大学・大学院卒業の看護師と、専門学校・短期大学卒業の看護師で、連携に関して必要と考える程度を比較した(表9)。「看護師と教員と一緒に研究する」「教員が看護師の行う研究を支援する」「教員が実習指導の研修会の講師をする」「教員が看護師の大学院進学の相談にのる」で、専門学校・

表 8 連携のメリット 病院看護師職位での比較

		スタッフn=177 主任以上n=237							
		とてもある		少しある		あまりない		全くない	
		人	%	人	%	人	%	人	%
自分自身	スタッフ	21	11.9	79	44.9	64	36.4	12	6.8
	主任以上群	35	14.8	109	46.2	78	33.1	14	5.9
自分の所属	スタッフ	23	13.1	94	53.4	49	27.8	10	5.7
	主任以上群	46	19.5	104	44.0	74	31.4	12	5.1
地域住民	スタッフ	17	9.7	68	38.6	83	47.2	8	4.5
	主任以上群	32	13.5	91	38.4	104	43.9	10	4.2
連携の相手	スタッフ	39	22.2	109	61.9	25	14.2	3	1.7
	主任以上群	61	25.8	121	51.3	47	19.9	7	3.0

表 9 必要と思う連携の内容 病院看護師学歴での比較

		専門学校・短大n=322 大学・大学院n=73							
		とても必要		どちらかという必要		必要ない			
		人	%	人	%	人	%	人	%
看護師が、学生の講義や演習の講師	専門・短大	55	17.2	195	61.2	69	21.6		
	大学・院	18	24.7	40	54.8	15	20.5		
看護師が、学生の実習計画に参加	専門・短大	82	25.5	180	55.9	60	18.6		
	大学・院	24	32.9	39	53.4	10	13.7		
看護師が、学生の实習指導	専門・短大	184	58.1	119	37.5	14	4.4		
	大学・院	48	65.8	23	31.5	2	2.7		
看護師が、教員対象の研修会の講師	専門・短大	26	8.1	157	49.1	137	42.8		
	大学・院	9	12.3	43	58.9	21	28.8		
看護師が、大学の勉強会に参加	専門・短大	67	20.9	201	62.8	52	16.3		
	大学・院	23	31.9	39	54.2	10	13.9		
看護師が、大学で教員	専門・短大	24	7.6	113	35.8	179	56.6		
	大学・院	6	8.3	32	44.4	34	47.3		
看護師が、大学の施設利用	専門・短大	169	52.9	130	40.8	20	6.3		
	大学・院	48	65.7	24	32.9	1	1.4		
看護師が、自分の活動を教員に情報提供	専門・短大	94	29.3	178	56.4	49	15.3		
	大学・院	29	39.7	38	52.1	6	8.2		
看護師が、卒業生の状況を教員に情報提供	専門・短大	68	21.3	151	47.1	101	31.6		
	大学・院	8	11.0	33	45.2	32	43.8		
看護師と教員と一緒に、看護師や学生対象の研修会開催	専門・短大	63	19.6	186	58.0	72	22.4		
	大学・院	20	27.4	42	57.5	11	15.1		
看護師と教員と一緒に、県内看護師対象の研修会開催	専門・短大	41	12.9	172	53.9	106	33.2		
	大学・院	13	17.8	42	57.5	18	24.7		
看護師と教員と一緒に、患者や住民対象の研修会開催	専門・短大	26	8.1	132	41.0	164	50.9		
	大学・院	9	12.3	37	50.7	27	37.0		
看護師と教員と一緒に、研究	専門・短大	26	8.1	173	53.9	122	38.0		***
	大学・院	18	24.7	35	47.9	20	27.4		
教員が、実習指導の研修会の講師	専門・短大	114	35.7	178	55.8	27	8.5		*
	大学・院	38	52.1	30	41.1	5	6.8		
教員が、看護実践の研修会の講師	専門・短大	82	25.6	179	56.0	59	18.4		
	大学・院	27	37.0	38	52.0	8	11.0		
教員が、病院の事例検討会や勉強会に参加	専門・短大	81	25.2	168	52.4	72	22.4		
	大学・院	22	30.1	41	56.2	10	13.7		
教員が、院内教育計画に参加	専門・短大	75	23.4	154	47.9	92	28.7		
	大学・院	20	27.4	42	57.5	11	15.1		
教員が、病院の看護師として勤務	専門・短大	78	24.4	139	43.4	103	32.2		
	大学・院	17	23.3	32	43.8	24	32.9		
教員が、看護師の大学院進学相談	専門・短大	87	27.4	173	54.4	58	18.2		*
	大学・院	31	42.5	34	46.5	8	11.0		
教員が、病院に勤務する卒業生の相談	専門・短大	116	36.1	162	50.5	43	13.4		
	大学・院	22	30.1	40	54.8	11	15.1		
教員が、看護師の行う研究支援	専門・短大	79	24.8	172	53.9	68	21.3		**
	大学・院	29	39.7	38	52.1	6	8.2		
教員が、病院の施設利用	専門・短大	107	33.3	167	52.1	47	14.6		
	大学・院	30	41.1	33	45.2	10	13.7		
教員が、自分の活動について看護師に情報提供	専門・短大	99	30.8	181	56.4	41	12.8		
	大学・院	29	39.7	40	54.8	4	5.5		
教員が、病院の情報を学生に情報提供	専門・短大	138	43.1	163	51.0	19	5.9		
	大学・院	39	53.4	30	41.1	4	5.5		

$\chi^2$  検定 期待度5未満の場合 Fisher 正確確率検定 \*p<0.05 \*\*p<0.01 \*\*\*p<0.001 無回答は分析に含まず

表 10 連携のメリット 病院看護師学歴での比較

		専門学校・短大n=322 大学・大学院n=73							
		とてもある		少しある		あまりない		全くない	
		人	%	人	%	人	%	人	%
自分自身	専門学校・短大	39	12.2	140	43.7	118	36.9	23	7.2
	大学・院	16	21.9	39	53.5	15	20.5	3	4.1
自分の所属	専門学校・短大	51	15.9	146	45.6	103	32.2	20	6.3
	大学・院	17	23.3	40	54.8	14	19.2	2	2.7
地域住民	専門学校・短大	39	12.1	120	37.4	146	45.5	16	5.0
	大学・院	6	8.2	31	42.5	34	46.6	2	2.7
連携の相手	専門学校・短大	72	22.5	181	56.6	59	18.4	8	2.5
	大学・院	23	31.5	40	54.8	9	12.3	1	1.4

χ<sup>2</sup>検定 期待度5未満の場合 Fisher正確確率検定 \*p<0.05 無回答は分析に含まず

短大卒業の群と大学・大学院卒業の群で有意な差がみられた。

連携によるメリットについて、専門学校・短大卒業の群と大学・大学院卒業の群で比較した(表10)。自分自身にメリットがあると考えた割合は、大学・大学院卒業の群の方が高く、専門学校・短大卒業の群と大学・大学院卒業の群で有意な差がみられた。

## 考 察

### 1. 教員と看護師の連携事業に対する意識

大学教員は「教員が看護師の大学院進学相談にのる」「看護師が大学の施設を利用する」を、病院看護師は「看護師が学生の実習指導する」「看護師が大学の施設を利用する」を連携事業として「とても必要」と考える割合が高かった。これらは、現在実際に行っているものであった。

大学教員が連携事業として「とても必要」という割合が高かった事業のうち、「教員が看護師の大学院進学相談にのる」「看護師が大学の施設を利用する」「看護師が学生の実習指導をする」「看護師が自分の活動を教員に情報提供する」「教員が病院の施設を利用する」「教員が病院に勤務する卒業生の相談にのる」は、病院看護師も「とても必要」と考える割合が高かった。大学教員、病院看護師ともに、大学と病院がそれぞれもつ設備の活用、学生の教育という人材育成、卒業生の相談にのったり自分たちの活動の情報提供という看護職としての資質向上という連携事業を必要と認識していた。一方、大学教員が「とても必要」と答えたもののうち、「看護師と教員一緒に研究する」「看護師が大学の勉強会に参加する」「教員が

看護師の行う研究を支援する」については、病院看護師は「とても必要」という割合が低かった。さらに、大学教員が「とても必要」と感じた事業のうち参加したい希望が多かったのは、「看護師の大学院進学相談」「看護師と一緒に研究」「看護師の行う研究の支援」と研究に関することであったが、看護師が「とても必要」と感じた事業のうち参加したい希望が多かったのは、「学生の実習指導」「大学の施設利用」「学生の実習計画に参加」「大学の勉強会に参加」と、人材育成や自分の資質向上、施設の利用であった。これは、大学と病院のそれぞれの役割が反映された結果と考える。看護学の発展には、臨床と教育が互いの役割を調節し、互いに啓発していくことが求められている<sup>14)</sup>。大学教員と病院看護師では、必要と考える連携事業および参加を希望する連携事業が異なっているからこそ、連携の必要があることが示唆された。

### 2. 大学教員と病院看護師の機能・人材及び設備等の活用に向けた今後の課題

看護における大学と医療機関とのユニフィケーションに関して、臨床実習の効果や演習の効果というように事業ごとの効果や意識は報告されているが、連携事業全体に対する大学教員や病院看護師を対象とした調査は見当たらない。また、効果的な連携のあり方は、それぞれの施設の特徴をふまえる必要がある。このため、本学と病院との連携の良し悪しを他と比べて単純に評価することはできない。また、大学教員の回答率が50%と高くないため、大学教員全体の意識が反映されていない。しかし、本調査の結果から大学教員と病院看護師ともに、両者の連携の必要性を認識していると考えられる。

大学教員が「とても必要」と考える事業の上位 9 項目をみると、「教員が看護師の大学院進学相談にのる」「教員が病院の施設を利用する」「教員が病院に勤務する卒業生の相談にのる」「教員が看護師の行う研究を支援する」と教員が行うものが 4 項目、「看護師が大学の施設を利用する」「看護師が学生の実習指導をする」「看護師と教員一緒に研究する」「看護師が大学の勉強会に参加する」「看護師が自分の活動を教員に情報提供する」というように看護師に求めるものが 5 項目あった。一方、病院看護師が「とても必要」と考える事業の上位 8 項目をみると、「看護師が学生の実習指導する」「看護師が大学の施設を利用する」と看護師が行うものが 2 項目、「教員が病院の情報を学生に提供する」「教員が実習指導の研修会の講師をする」「教員が病院に勤務する卒業生の相談にのる」「教員が病院の施設を利用する」「教員が自分の活動について看護師の情報提供する」「教員が看護師の大学院進学相談にのる」というように教員に求めるものが 6 項目であった。大学教員と病院看護師のどちらも、自分の役割を相手に対して発揮したいという意識と、相手の役割を自分に対して発揮してもらいたいという意識をもっている。大学教員は病院看護師に、病院看護師は大学教員に対して、それぞれがもつ役割を発揮することで、双方の資質の向上につながると考える。

病院看護師は、大学教員に比べ、連携することで自分自身や自分の所属に対してのメリットを感じていなかった。病院看護師が必要と考える連携事業は、学生指導、施設利用や卒業生のフォローとさまざまである。また、職位や学歴といった背景によって連携に必要と考えるものに特徴がみられた。連携によって期待するものを丁寧に把握し、必要なもの、参加希望の多いものを積極的にすすめることが必要と考える。

### 3. 山形県の医療の質の向上や医療人材の資質向上に向けた今後の課題

大学・病院連携協議会の目的は、両機関の役割をふまえ、それぞれの機能・人材及び設備等の活用を図りながら、連携をさらに推進することにより、山形県の医療の質の向上、および医療人材の育成・資質向上等に貢献することである。しかし、「看護師と教員と一緒に県内の看護師対象の研修

会を開催する」「看護師と教員と一緒に患者や住民対象の研修会を開催する」を連携事業として「とても必要」と答えた大学教員、病院看護師はともに少数であった。また、それらに参加を希望する大学教員、病院看護師も少数であった。さらに、両者の連携が、地域住民にとってもメリットがあると答えたものは少なかった。連携事業として、県内の看護師や住民を対象とした事業は現在行っていない。山形県の医療の質の向上や医療人材の資質向上に向け、大学教員と病院看護師の意識を高め、地域住民や県内の看護師を対象にした連携事業を実施していくことが今後必要と考える。

看護系大学と医療機関との効果的なユニフィケーションには個々人の活動だけでなく、体制が必要である<sup>11) 15)</sup>。連携事業として必要と考える事業や、参加を希望する事業は、大学教員と病院看護師では異なっていた。連携を推進するためには、両機関がもつ異なる意見や役割を調整する部署が必要となる。連携協議会の役割は大きいと考える。

## 結 論

山形県立保健医療大学と山形県立中央病院との連携事業に関して、大学教員は「教員が看護師の大学院進学相談」「看護師が大学の施設利用」「看護師が学生の実習指導」をととても必要と考え、「看護師と一緒に研究」「病院で開催する勉強会に参加」を希望していた。病院看護師は「看護師が実習指導」「看護師が大学の施設利用」「教員が病院の情報を学生に提供」をととても必要と考え、「大学の施設利用」「大学で開催する勉強会に参加」を希望していた。「自分自身」「自分の所属」「地域住民」「連携の相手」に対して連携のメリットがあると考えた割合は、教員の方が看護師に比べいづれも高かった。

連携事業として「とても必要」と認識し参加希望が多かったのは、大学教員では研究に関することであったが、病院看護師は、人材育成や自分の資質向上、施設の利用と、両者で異なっていた。大学と病院が持つそれぞれの機能や人材を有効に活用することで、連携をさらに推進できる可能性があることが示唆された。

## 利益相反

本研究に関し、開示すべき利益相反はない。

## 引用文献

- 1) Smith, D. M. . Education and service under one administration, *Nursing Outlook*, 1965 ; 13(2), 54-56.
- 2) 飯野京子, 亀岡智美, 松山友子, 工藤快枝, 長尾信子, 石岡朋子, 渡辺輝子, 竹尾恵子. 海外における看護学教育機関と保健医療機関の連携に関する研究の現状. *国立看護大学 校研究紀要*. 2003 ; 2(1), 10-16.
- 3) 白井里佳, 新関裕幸, 呉聖人, 山邊えり, 田中博子, 師岡友紀, 池側均, 瀬尾恵子. 救命センター看護師指導による簡易型 BLS 演習における看護学生への影響～臨床と大学とのユニフィケーションによる効果～. *大阪大学看護学雑誌*. 2011 ; 17(1) : 17-24.
- 4) 渡辺美奈, 山本洋行, 脇本寛子, 井出由美, 岩田広子, 矢野久子. ユニフィケーションによる看護実践能力向上に有用な視聴覚教材に関する文献的考察. *名古屋市立大学看護部紀要*. 2011 ; 10 : 9-19.
- 5) 高村祐子, 前田隆子, 中村摩紀, 川波公香, 立原美智子. 大学と付属病院におけるユニフィケーションの実践報告 患者の自立を促進するための以上援助技術の学生の学びにおける臨床と教育の協働. *茨城県立病院医学雑誌*. 2014 ; 31(1) : 29-33.
- 6) 庄司靖枝, 尾崎優子, 笹尾裕美, 高松邦彦, 中田康夫. 卒業生の参加を取り入れた小児看護学演習の意義～質問紙調査の結果より～. *神戸常磐大学紀要*. 2018 ; 11 : 157-168.
- 7) 齋藤君枝, 中村勝, 佐藤富貴子, 笠井美香子, 定方美恵子, 清水詩子, 関島香代子, 西山悦子, 渡邊岸子, 後藤雅博. 臨床看護師による演習講師の指導評価とユニフィケーションの再考. *新潟大学医学部保健学科紀要*. 2011 ; 10(1) : 65-71.
- 8) 西山涼子, 武用百子, 早川博子, 志波充, 岡本恭子. ユニフィケーションを基盤とした精神看護学領域における実習指導の体制づくり. *和歌山県立医科大学保健看護学部紀要*. 2016 ; 12 : 65-71.
- 9) 土肥美子, 道重文子, 川北敬美, 中山サツキ. 教育と臨床によるユニフィケーション体制の評価－A 大学看護学部基礎看護技術演習に参加した教育指導者の学びと演習の継続に向けた課題の検討－. *大阪医科大学看護研究雑誌*. 2018 ; 8 : 36-42.
- 10) 高村祐子, 長岡由紀子, 脇田泰章, 吉良淳子, 綾部明江, 安川揚子, 前田隆子. 大学と付属病院のユニフィケーションによる院内看護研究研修の評価－受講者が自覚する自己の変化と今度の課題－. *茨城県立病院医学雑誌*. 2017 ; 34(1) : 1-10.
- 11) 市村久美子, 旭佐記子, 高村祐子, 寺門通子. 看護教員の臨床活動に焦点をあてて茨城県立医療大学と付属病院のユニフィケーション改善の取り組み. *Nursing Business*. 2013 ; 7(9) : 47-51.
- 12) 常磐洋子, 堀越政孝, 塚越聖子, 高田幸子, 杉本厚子, 大谷忠広, 富田千恵子, 金井好子, 深澤友子, 中村美香, 瀬沼麻衣子, 貞形衣恵, 牛久保美津子. 地域完結型看護が実践できる看護職の育成－大学教員と附属病院看護部とのユニフィケーションによる取り組み－. *群馬保健学研究*. 2016 ; 37 : 127-129.
- 13) 山手美和, 綿貫成明, 笠原嘉子, 大石恵子, 相良君映, 中島朋子, 河正子, 飯野京子. 看護大学と医療機関における看護師の連携を基盤とした「たま エンド・オブ・ライフ・ケア交流会」の活動報告. *Palliative Care Research*. 2014 ; 9(3) : 907-910.
- 14) 高田法子, 平岡敬子. ユニフィケーションモデル (Unification Model) の検討－臨床と大学の連携と協働の可能性－. 2001 ; 2 (2) : 1-8.
- 15) 清水嘉子. 看護学の発展と地域への貢献を目指した臨床と教育の連携体制の構築. *看護展望*. 2016 ; 41(6) : 70-75.

## 要 旨

山形県立保健医療大学と山形県立中央病院との連携に関する意識と課題を、無記名質問紙調査により明らかにした。大学看護学科教員 26 人と病院看護師 643 人に調査用紙を配布し、それぞれ 13 人、434 人から回収した。

大学教員は「教員が看護師の大学院進学相談」「看護師が大学の施設利用」「看護師が学生の実習指導」をととても必要と考え、「看護師と一緒に研究」「病院で開催する勉強会に参加」を希望していた。病院看護師は「看護師が実習指導」「看護師が大学の施設利用」「教員が病院の情報を学生に提供」をととても必要と考え、「大学の施設利用」「大学で開催する勉強会に参加」を希望していた。「自分自身」「自分の所属」「地域住民」「連携の相手」に対して連携のメリットがとてもあると考えた割合は、教員の方が看護師に比べいずれも高かった。

連携事業としてとても必要と認識し参加を希望する事業は、大学教員と病院看護師で異なっていた。大学と病院が持つそれぞれの機能や人材を有効に活用することで、連携をさらに推進できる可能性があることが示唆された。

**キーワード：**ユニフィケーション 看護

山形県立保健医療大学 山形県立中央病院